

2025 年 4 月 13 日（日）棕櫚の主日朝礼拝説教

『成し遂げられた』井上隆晶牧師

詩編 69 篇 14～22 節、ヨハネによる福音書 19 章 28～42 節

①【王であるキリストと彼の王国を受け入れよう】

今日は棕櫚の主日です。棕櫚の葉を手にとって礼拝します。キリストはこの日、子供のロバに乗ってエルサレムに王として入場しました。それは旧約聖書の「見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者。高ぶることなく、ろばに乗って来る。雌ろばの子であるろばに乗って。」（ゼカリヤ 9：9）の預言の成就でした。群衆は喜んで勝利のしるしである棕櫚の枝や平和のしるしであるオリーブの枝を取り、自分の服を道に敷いて王であるキリストを迎え入れました。しかし一週間もしないうちに彼らは手のひらを返したように、この王を見捨て、地上のローマ皇帝を選んだのです。

しかし、この日以来「キリストの王国、神の国」はこの地上に既に来ているのです。私たちは洗礼の時に死んで、この地上の国を去り、キリストを私の王として受け入れ、彼の王国を選んだのです。そんな国が一体どこにあるのかと言う人もいるでしょう。それは氷山の様に本国は天に隠れており、地上ではその国を慕い求めて礼拝する人々にその姿を現すのです。この世がすべてだと思っている人には見えないのです。王なるキリストも、今は隠れていますが、やがて幾万の天使を引き連れてご自分の国に帰って来られます。地上の国々はやがて巻物の様に滅びますが、キリストの王国は永遠に続きます。その時、すべては明らかになり、私たちの労苦は実を結ぶことでしょう。私たちは今日、このキリストの王国を本国とし、王であるキリストに喜ばれることを行い、その方に認められるような僕になることを誓うのです。あなたにはその王国が見えていますか？

②【新しい神の家族の誕生と呪いの終わり】

さて、イエス様の十字架の記事でヨハネの福音書だけにあるものがあります。それは「イエスは母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に『婦人よ、御覧なさい。あなたの子です』と言われた。それから弟子に言われた。『見なさい。あなたの母です。』その時から、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った。」（ヨハネ 19：26～27）というものです。イエス様は母マリアに対して弟子のヨハネを「あなたの子です」といわれ、弟子のヨハネに対しては母マリアを「あなたの母です」と言われました。十字架の下で、キリストの言葉によってここに血肉によらない霊的な「新しい家族」が誕生したのが分かります。これは教会のひな形です。キリストによって生まれる新しい家族です。それは永遠に続く家族です。教会がなぜ「兄弟・姉妹」と呼ぶのかはそういう意味なのです。私たちも同じようにマリアを母と呼び、天の聖徒たちの家族になるのです。

●フィリップ・ヤンシーはこのようなことを書いています。「創世記を読んでみよう。そこには家族の歴史が書かれている。それはアダムとエバの家族で始まる。…読み続けるとアブラハムの家族に出会う。何十年もかかって旅をした家族だ。それからイサクの家族の物語が、そしてヤコブの家族の物語が続く。…家族の歴史を語る聖書とは対照的に、教科書が語っているのは文明の起源と滅亡の歴史である。今日の新聞をにぎわせているのは、国家、都市、大学、政府機関、企業についての記事だ。焦点は家族から組織へと移っている。だが、新約聖書は、教会を組織よりも家族のようなものとして、頑固なまでに提示している。」

教会というのはキリストによって結ばれた人たちの群れなのです。だからキリストが小さくなってゆけば教会はバラバラになります。その反対にその人の中のキリストがどんどん大きくなり、個人が小さくなってゆけば、その教会は一つの身体の様になり、その結びつきは強いものとなり、家族のような温かいものになるでしょう。自分の中のキリストを大きくしてください。

この後、イエス様は、すべてのことが成し遂げられたのを知り、「渴く」といわれました。人々が酸いぶどう酒を海綿にふくませてイエス様の口元に差し出すと、イエス様はこのぶどう酒を受けて「成し遂げられた」(ヨハネ 19:30)と言って、頭を垂れて息を引き取られました。口語訳では「すべてが終わった」です。英語では「It is finished. It is accomplished!」です。救いに関するすべてのことが完了したという意味です。十字架は恐ろしく悲惨ですが、何か不思議な慰めを感じます。闇ではなく光を放っています。古いものの終わりと、新しいものの始まりを告げています。イエス様の十字架を教会は「新しい命の木」と呼びました。十字架によって死は終わり、万物は命を吹き返したからです。十字架がすべての呪いを終わらせました。十字架は人間の苦難と死の中にしっかり立っています。十字架は神がそれらを共に負っていて下さる「しるし」です。十字架がそこに立っているなら、どんな地獄でも、そこはエデンの園へと変わるのです。

③【血と水という命が全人類のために流れ出た】

十字架につけられた人たちは普通 7 日ほど生きています。しかし翌日から大事な過越祭が始まるので、祭司長たちは遺体をそのまま十字架上に掲げることにより祭りが汚されるのを恐れ、その日の内に殺すように犯罪者たちの足を折りました。足の骨を折られると体を支えられなくなって窒息死するからです。しかしイエス様のところに来ると既に死んでいたのだから足の骨は折りませんでした。これは「骨の一本も損なわれることのないように彼を守ってくださる」(詩篇 34:21)の成就です。そこで兵士が本当に死んだかどうかを確認しようと思ってイエス様を槍で刺しました。「兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した。するとすぐ血と水が流れ出た。」(34 節)とあります。「彼らは、彼ら自らが刺し貫いた者である私を見つめ…」(ゼカリヤ 12:10)の成就です。医学的にはわき腹から血と水が流れ出るとするのは心臓破裂の症状です。心臓がもたなくなり細胞が破壊されて水に

なり、血と分かれて出たのです。ヨハネは医学的なことは分からなかったでしょうが、この現象を神の証しと解釈しました。この水と血は洗礼と聖餐の秘蹟の象徴です。私たちはこの水と血によって生き返るのです。受難節の祈祷文はこう書いています。

●「ああ、十字架の力よ、キリストは教会のために節制の花を開き、エデンにおけるアダムの不従順という罪の根を抜きました。この罪の根は昔、人々に死をもたらしました。しかしキリストは常に世界のために不死を流されます。楽園から泉が湧き出たように、今もう一つの泉であるキリストから命を与える血と水が出ました。すべての人はこれによって生き返ります。」

最後に一つの話をしてしまおう。

●ソビエト共産主義が起こり、その軍隊とロマノフ王朝の軍隊が敵と味方に分かれて三年間戦っていた時の実話です。ある小さな村が、共産主義の軍隊の手に落ちました。4歳と5歳の幼い子供を抱えた一人の母親がその村に取り残されました。彼女の夫はロマノフ王朝の軍隊に所属していました。彼女はある家に隠れ、脱出するチャンスを待っていました。ある日の夕方、母親と同じ20代前半のナタリという女性がその家のドアをノックし、母親に向かって「あなたはこういう名前の人なの」と尋ねました。母親が「そうだ」というと、ナタリは「あなたがここにいることは発見されているのよ。今夜には兵士たちがあなたを殺すために来るわ、すぐに逃げなさい」と伝えました。母親が「とても逃げれないわ」というと、ナタリは「逃げられるわ。私が後に残る。やつらがあなたを捕まえに来たら、あなたの名前を名乗るわ」といいます。母親は「そんなことをすればあなたが殺されるわ」というと、ナタリは「いいの。私には子供はいないから」こう言って、ナタリはその家に残り、彼女は死んだのです。（『祈りの生まれる時』より抜粋）

ナタリは死が忍び寄る時間、家の中で神に祈ったと思います。すると「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」という主キリストの声が聞こえて来たのではないのでしょうか。ナタリも神の国を選び、その王であるキリストの声に従って友の為に自分の命を差し出したのです。

昨日、日本聖公会大阪教区主教按手式に行ってきたのですが「献身」ということを深く感じさせられました。主教が、新しく主教になる人に尋ねます。「あなたはこの召命を受け入れ、キリストに全く服従してそれに応えますか」「あなたはキリストの心を心とするために忠実に祈り、また聖書を学ぶことを努めますか」「あなたは、あなたの民の心の目を開かせ、良心を奮起させるために大胆にキリストの福音を宣言し、説き明かしますか」「あなたはすべての人に親切であり、貧しい人、寄るべない人、助け手のない人々の身になってこの人々を守りますか」これを自分に再び言われているように聞こえました。皆さんもそうです。牧師だけでなく、信徒も信徒職として献身したのです。それをもう一度、新たに思い起こしたいと思います。